

第73号
平成20年
6月14日

すまいるたうん



汐入

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL 5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL 090-2657-0300

世界に全国に発信 もてなしの街 山谷



「よそ者に寛容な街なんです」

「オタクのベースキャンプ」「下町の六本木」と言われるようになって来た山谷。山谷の簡易旅館約160軒が加盟する城北旅館組合の広報担当副組合長・帰山哲男さん（57）の父である帰山仁之助さんは、山谷のビジネスホテルの元祖と言われています。

帰山さんの祖父仁吉さんは「大緑仁吉」の四股名で明治時代の大相撲の力士として活躍しながら、この地で瀬戸物業を起こし大正12年9月の関東大震災と昭和20年3月の東京大空襲で二度も全財産を失いましたが、戦後は仁之助さんと共にGHQから軍用テントの払い下げを受けたりして浅草一帯で多数の簡易宿泊所や長屋を建て、戦争罹災者や満州からの引揚者などの多くの流浪者の住居を提供しました。この山谷での労働力の確保は戦後の東京復興の原動力となりました。

「負のイメージは、歴史の流れのひとつコマだけ」

山谷は、お江戸の時代から旅芸人、行商人などが利用する木賃宿のある町として栄えました。また手間ひま掛けて贅を尽くす江戸の食文化の情報発信地でもあり、食材にこだわりを持つ高級会席料理屋として繁盛した「八百善」は4代目の八百善主人栗山善四郎当時一流の文人墨客と交流があり、その著書『料理通』には葛飾北斎などが挿画を寄せています。高度成長期からバブル崩壊までの山谷は、建設現場で働く日

雇い労働者が全国から集まる活気あふれる街となり、簡易宿泊所には多い時で一万五、六千人が宿泊しておりました。その人達の食を支えたのが帰山哲男さんの父、仁之助さんが創設した名物食堂「あさひ食堂」です。とにかく安く終戦後の食料難の時代に他の店と比べて倍の量のどんぶり飯が食べられるという評判で、朝5時の開店時には百人を超す人達が並んだため近所から苦情も…。昭和30年代からたびたび起きた暴動で、山谷は危険な街というイメージが由来になりました。江戸時代からの長いスパンで語れば山谷が負のイメージを持っていたのはほんの数十年前しかありません。バブル崩壊後は、建設不況や産業構造の変化等で労働者が減り、一時期は220軒以上あった簡易宿泊所も激減することになりました。

現在、宿泊の絶対多数の方が、かつての高齢化した日雇い労働者の人達ですが、2002年サッカーワールドカップ（w杯）あたりから外国人バツクパッカー（伝統文化や歴史を味わいながら世界中を「チープな旅」で巡る人々。30代もある様な大きなリュックを背負って移動する事が多いことからそう呼ばれる。）が激増してきました。

欧米系の旅人が支流の山谷ですが、最近では旧ソビエト連邦諸国やアジアならタイやマレーシアなどからも訪れています。ロンリープラネット社の旅行ガイド誌やニューヨークタイムズ紙の電子版にも紹介された帰山哲男さんの実弟の博之さんの経営する「ホテル ニュー紅陽」は外国人客が約9割を占めています

「一線を引かず、親戚（しんせき）の家に泊まっているようなつもりで過（あ）してもらう」

また、“節約派”出張サラリーマン、就職活動で東京のリクルート・ルック姿の女子大生、デイズニールランドなどのテーマパークに行く家族連れなどが節約のため利用することも多いです。部屋は、全室テレビ、エアコンは標準装備。共同の浴室や男女シャワー室からコイン式の自炊場&洗濯場もあり、門限がないので限られた東京滞在も有意義に過せます。

エコノミーホテル『ほていや』の個室は一泊素泊（税込）2600〜2800円、ドームホステル『えびすや』のドミトリーなら超格安の1500円。1階にある団体室なら、通常3名〜10名までのグループや家族の方が同時に安く泊まれるので人気があり1名2000円。（3名未満でも600円で貸切利用可能）

簡易宿泊所に長期に滞在する高齢者の方達に安全な健康食を安く提供したり、外国人旅行者などにもさまざまな支援が出来ないかと模索するボランティアも多く、山谷地区の人々は昔から差別心のない優しいもてなしの文化があります。行政の区割りでは南千住も山谷地区になります。

最近では山谷に宿泊する外国人客へ東京下町のマニアックなツアーを提案する旅行社もあります。北海道から来た知人も子連れで連泊し、リピーターになりました。

犯罪が実は少なく安全で温かな町、世界の山谷（San'ya）を友人、知人を紹介下さい。

エコノミーホテル「ほていや」
台東区日本堤1丁目23-9
TEL : 03-3875-5912
info@spocom.net
http://www.spocom.net

